

里地通信 5月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@niftyserve.or.jp

連載：里地によせる想い～幹事紹介

内藤 正明（ないとう まさあき）

京都大学 環境情報工学講座 教授
里地ネットワーク幹事代表

都市なら都市計画、自然地帯なら自然保護対策などがありましたたが、里地は都市から自然へ至る中間領域。制度的、学問的にも明確な規定がなく、規制も不十分だったために草刈り場的に乱開発されたり、放っておかれて過疎化が進んだりしてきました。

里地には経済的価値、環境保全機能、審美的機能の3つの機能があるます。経済は食料生産が代表的な例。環境は生物の多様性の保持や二酸化炭素の吸収源としての森林などの部分です。審美的な点については景観が人の心をいやす効果でしょうか。こうした様々な面から里地に対するニーズが今高まっています。

里地側には、過疎化が極限まで進み、もはや崩壊寸前という危機感があります。こうしたニーズと危機感を背景に、自然を生かしながらの里地振興が求められています。従来の「村おこし」など振興策は講じられてきましたが、かつてのリゾート開発のように、中央からの発想で、一時の客寄せに終わってしまったものが多くあります。

里地の自然と文化、歴史を生かしながらの振興はまず地域主導であることが前提です。地元資源を生かした自然共生型の経済と、都市との持続可能な交流をはかるものが望まれます。そのためには地元の人たち自身が、何が地域資源なのかをしっかりと見つめ直し、外部から共感を得る努力が必要になります。

ただ、日本は中央集権を100年間も続け人材も金も中央に集まっています。里地振興は突き詰めると、中央集権というこの国のあり方を変えるところにまで行き着くと思います。

経歴：1962年京都大学工学部衛生工学科卒業，66年同大学大学院工学研究科博士課程中退，同大学工学部工学部衛生工学科助手，68～69年米カンサス州立大学助教授，69年京都大学工学部助教授，工学博士，73年同大学講師（非常勤），74年国立公害研究所環境情報部情報調査室長，77～79年筑波大学環境科学研究科講師（非常勤），79～82年同教授，83年国立公害研究所総合解析部長，90年国立環境研究所地域環境研究グループ統括研究官，95年京都大学工学研究科環境地球工学専攻教授

所属学会：土木学会，環境科学会，水環境学会

主要著書：

- 「環境システム工学」日刊工業新聞社（1977）
- 「環境指標」学陽書房（1986）
- 「環境を守る技術」読売新聞（1991）
- 「地球環境キーコンセプト74」日刊工業新聞社（1992）
- 「エコトピア」日刊工業新聞社（1993）
- 「地球時代の環境観と社会像」ESSO 記念出版（1993）
- 「環境調和型都市」ESSO 記念出版（1994）
- 「環境調和型技術」ESSO 記念出版（1994）

里地セミナー バイオリージョナリズム

講演：ピーターバーグ

(プラネット・ドラム財団理事)

通訳：藤公晴(デープエコロジスト)

開催日：2月26日

場 所：環境パートナーシッププラザ

バイオリージョナリズムとは

人間の都合による境界ではなく、自然の特徴により一つのまとまりを持つ地域のことをバイオリージョンといいます。動物、植物、地形、土壌、これらに根ざした人間の文化が、バイオリージョン(境界)を定める手がかりとなります。バイオリージョナリズム(生命地域主義)とは、私たちの生活の場である地域を、多様な生物が共生できるシステムづくりを行うことです。バイオリージョンは、科学的な要素を示すように思われています。しかし、文化的な意味あいの方が重要です。バイオリージョンは、「環境主義」とも説明されますが、広義の環境という意味で、水域や地形がどのように成り立っているのか、土壌がどのような構成のもとに成り立っているのか、その場所にしかない原生動植物種は何か、などを知ることからはじまります。そして、人間はその圏内でそれらとともに生命圏を構成していることを認識し、今の生活のなかで、Re-Inhabit「再定住」することを目的としています。

バイオリージョンの機能

バイオリージョンには、3つの重要な要素があります。

地域の生命圏を復元する(=復元生態学)

地域の持続可能性を高めること。(必要なものを地域内で補っていくという発想)

バイオリージョンの活動を支援しサポートする

古代の人々はみな分散して生活していました。しか

し、現在アメリカ国民は80%が沿岸地域で生活しています。2010年までには、世界の半分以上の人が、都市に住むことになるでしょう。都市に住む人の多くは自然を敵視しています。壁が汚れるとか、屋根が錆びるとか、自然の影響は人工物を侵す存在として捉えられがちです。食物も、エネルギーも、ごみも、人工空間でしか考えない都市生活を維持することは、相当な負担を自然にかけていることとなります。

江戸のバイオリージョン

江戸時代の日本の暮らし方には、バイオリージョンがありました。この思想を学ぶ時、いつも江戸時代の日本人の生活スタイルが引用されます。日本の活動家のほとんどが、この日本の歴史に詳しくないのは不思議です。日本の文化を復元することを望みます。この兆候がいたるところで現れているように思います。

提言

里地ネットワークとして地域の持続的な経済を考える上で、まず、バイオリージョンがあり、そこに人が暮らしているということを前提にしなければいけません。起業家精神も重要です。バイオリージョンによる変革は、新しいビジネスを生み出すからです。シャワーの水を2次利用し、トイレに活用するというのも、その一例となります。

バイオリージョンは、自分の住む生命圏を理解することからはじまります。教育課程にバイオリージョンの教育が不可欠です。

食べものについても、地域独自の食があるはずですが、横浜で会った方は、沿岸80kmの近海魚以外は食べないといいます。エネルギー消費の観点からです。農業では、パーマカルチャーを取り入れるのがよいと思います。太陽のエネルギー、森の、海の、地域のエネルギーを生かすことが大切です。

セミナー報告

ドイツの環境まちづくり構想

開催日：4月22日

主催：バルディース研究会

講師：高杉晋吾（社会評論家）

エムシャーパーク構想とは

エムシャー川はドイツルール工業地帯にあり、17の都市が河川流域で一体となった重化学工業地帯を形成しています。九州の工業地帯と同じく、都市間隔が狭く、そこでドイツの炭坑労働者40万人の大半が働いています。ここはドイツ国内でもっとも環境汚染がひどく、炭坑の閉鎖が進む中、環境汚染を改善しつつ産業構造を転換させる「エムシャーパーク構想」という取り組みが行われています。

まず地域ごとに住民による地域づくり提案がされ、それを検討し、内容の優れたものを選定します。次に芸術家、デザイナー、建築家、都市計画家などから、この提案に対するアイデアを公募し、住民によるコンペを行い、洗練された地域づくりのプロジェクトを作成します。

そして、そのプロジェクトを実現するため新たな企業を設立し、重化学工業から他産業への転換、景観を大切にしたまちづくり等の推進を行います。このプロジェクトはこれまで116にのぼり、現在は10余が進められています。エムシャーパーク構想は、このプロジェクトを総合的に結びつけ、エムシャー川流域を総合的な「パーク」にするための総合プロジェクトです。その目的のため、26億円の基金をもとに流域全体に総合的な環境を持たせる役割を果たす、10年限りのIBAエムシャーパーク社が第3セクターとして設立されています。

この企業は実行予算や地域に対する命令権や強制権がなく、プロジェクトを推進するのは、あくまで地域住民や商工業者、地域企業です。

プロジェクトの実例

水が飲める川への復元

ドイツには、人々の手と環境政策によって水が飲めるほど汚染から回復した川がいくつもあります。エムシ

ャー川支流の小さな川も、炭坑や産業の汚水を排出する三面張りの水路でしたが、近自然工法により美しい川に復元しています。

負の遺産を文化資源へ

エッセン市では炭坑跡地をそのまま産業博物館や記念館とし、文化保存センターとして生かしています。

ガスタンクをダイビングクラブに

デュイスブルグという都市の北部では製鉄所製錬跡地200haの施設を壊すことなく1マルク（邦貨72円）で購入し、カントリーパークとして、市民の憩いの場として活用しています。例えば、ダイバーズクラブのメンバーは残されていたガスタンクの中に水を張ってダイビングクラブにしています。

土地利用に対するコンセンサス

様々なプロジェクトを実現する上で、土地利用に対する考えや法律の整備が必要です。地域の人々に、環境に対する配慮や社会的な条件の改善、文化的に地域社会に情報を開示し、地域の人々自らの手でアイデアを出し、発想を具現化していくこと。それをサポートするのがIBAエムシャーパーク社です。

日本の実例と問題

日本では天竜川流域に地域の企業間のネットワークで作られたを持った伊那リサイクルシステム研究会があり、企業を中心とし、行政、市民と共に環境保全活動を行っています。また、天竜川の上流である諏訪湖では、諏訪環境まちづくり懇談会が、「泳げる諏訪湖」を目指して環境保全活動を積極的に行っています。

しかし、多くの日本の事例では、情報開示から個別地域の構想策定、実施に至るまで、国家が様々な許認可権を独占し、予算を執行するのが現状です。

炭坑の町、筑豊では、地域の主体である住民は無視され、再開発のための都市計画も明確ではなく、国が定めた石炭六法を三年後に、国がうち切ります。

日本は循環型社会を具体的に作り上げていく手法をドイツのエムシャーパーク構想のようなところから学んでいく必要があると思います。

幹事会報告

4月9日、環境パートナーシップオフィスにて、第1回幹事会が開催されました。

はじめに、幹事一人一人が関わっている地域の活動紹介を行ない、幹事間の情報交流を行なった後、平成10年度の事業計画の基本方針を以下の通り決定いたしました。

地域シンポジウムについて

全国5地域でシンポジウムを開催する。

開催地に関しては、岩手県の東山町、愛知県美浜町で検討中。他の3地域に関しては会員の入会動向と併せて検討。

里地セミナーについて

里地振興を図る上で必要な概念や定義を地域での事例報告を交える形で共有することを目的に東京で年6回開催。これは、金・土曜日の連続セミナーとし、必要に応じてミニセミナーを逐次開催。

環境保全型里地調査事業について

里地共生事業のモデルとなる地域を、里地ネットワークの会員の中から定め、調査事業を行なう。この地域は6地域とし、上記のセミナー開催地と重複することもある。調査事業の具体的な内容は、地域によって異なること。

具体的には、地域内資源の発掘、基本イメージの作成、ツーリズムの振興、環境保全型技術の導入等、また、地域内の同意形成という側面の調査事例もあり得る。

環境保全型技術の検討について

平成10年10月から、技術情報の収集を開始する。技術情報に関しては範囲が広範であるため事務局体勢の充実を図る必要もでてくる。人員体制を含め詳細は7月以降の幹事会で再度検討する。

広報活動について

里地通信は、毎月月初の発行を予定する。ホームページは、現在、資料、写真等の収集整理中。

ガイドライン、里地憲章について

7月の幹事会より情報収集を開始し幹事会ごとに検討を深めていく。

政策提言について

本年度は、地域セミナー及び里地調査事業を骨格にするため、政策提言に関しては、平成11年度事業とする。

幹事会について

幹事会の開催は、4月、7月、9月、11月、2月を予定する。

平成10年度幹事（敬称略）

大久保幸夫	（株）リクルート 地域活性事業部長
岡島成行	環境ジャーナリストの会
斉藤宏一	愛知県美浜町長
瀬田信哉	（財）自然公園美化管理財団専務理事
千賀裕太郎	東京農工大学教授
廣田耕一	ジャスコ（株）環境・社会貢献推進室長
内藤正明	京都大学教授
萩原喜之	中部リサイクル運動市民の会
長谷山俊郎	農業研究センター農業計画部農業組織研究室長
宮崎暢俊	熊本県小国町長
竹田純一	里地ネットワーク事務局長

事務局日記 98年4月

4月16日(木)

日本エコライフセンター

代表幹事 田中栄治さん

・事務局 斉藤隆さん訪問

里地事務局から徒歩5分ほどのところに地域交流センターがあり多くのNGOが同居しています。この事務局の方々は、総勢で約40人程、主旨に賛同するいくつかの団体の事務局を兼任されているようで、その範囲の広さに驚かされました。

日本エコライフセンターは、エコライフとエコマネージメントの普及と推進に向けて「産・官・学・野(市民・NGO)」の様々な分野の人々の交流と情報交換及び調査研究をすすめるために、1991年6月に設立。情報収集、交換やプロジェクトの実施等幅広く行っていました。里地ネットワークとは、地域振興で重なり合う部分が多いと思い、訪問しました。エコライフセンターから里地ネットワークへは、地域活性の現場でのフォローアップを期待されているようでした。

4月16日(木)

環境文化研究所

主任研究員 河原利和さん訪問

環境文化研究所は、地域文化、居住環境、余暇環境、地域振興などに関わる調査研究、情報の提供等を通して、豊かな社会を目指すシンクタンクです。里地ネットワークの会員である河原さんは、地域調査を行っているうちに里地の荒廃した現状を実感、いままで関わった里地により深く関わり、内部からの振興も検討されているようです。

熊本県の小国町の宿泊研修施設「木魂館」にて出会いました。

河原さんには、9月のセミナーの講師をお願いしております。

4月20日(月)

環境保全と自然住宅の会

代表・松下修さん来訪

松下さんは宮崎県の諸塚村の杉をテーマとして、村の森林資源の活用と村全体の活性化を目指している地域振興の仕掛け人です。本職は企業向けの事業開発、商品開発のコンサルタントですが、最近は山地、里地にぞっこんで、「地域経営が主流になりそうです」とか。諸塚村産の自然住宅の販売を目標に、着実に村内の意識や思いを同じくする人々の輪を広げているようです。

4月20日(月)

日本大学生物環境工学科

教授・白岩隆己さん来訪

研究室は農地整備学研究室。白岩さんは、研究室以外に様々な研究機関の委員を務めておられます。専門は、農業土木で、農業用水路や土地改良も手がけられています。

5月13日(水)には、研究室を訪問します。

なお、グラウンドワークの糸長教授は、日大藤沢校舎の白岩研究室のななめ前とか。

同行希望の方は、竹田までご相談を。(若干名のみ)

4月24日(金)

民族文化映像研究所

所長・姫田忠義さん訪問

1960年代初頭から「私たちが生を承けた日本列島に生きる庶民の生活と生活文化を記録する」ため、日本の基層文化に目を凝らし、記録し、映画を制作し続ける姫田さんを訪問しました。実は、姫田さんは、私が生活している鎌倉の谷津田で知り合い、身近な文化の重要性を教えていただいたのが出会いでした。日本全国の民族文化を記録し、現在その数は120本にもなるそうです。この映像は、貸し出しも行われています。また、自主上映会も可能のようです。毎週金曜日、東京新宿御苑前にある研究所事務所で、自主上映会が行なわれています。参加してみたいかがでしょう。

ご案内と募集

セミナー

「エコミュージアムと里地おこし」

(第2回里地セミナー)

地域資源の発掘の技法と事例を学びましょう。

『エコミュージアムとは、フランスの博物館学者アンリ・リベールが1970年代に提唱した新しいタイプの博物館概念であるが、従来のハコモノのイメージの博物館概念とは大きく趣を異にする。エコミュージアムの目的は「地域社会の人々の生活とその自然及び社会環境の発達過程を生態系の立場から歴史的に提案し自然及び文化遺産を過去から現在にわたって保存し、研究する場を提供し、過去から積み重ねてきた遺産を保護し、それらを学ぶ場である。フランスで展開しているエコミュージアムを見ると、実際には地域の研究所・環境保全センター・観光拠点といった多様な姿をとっている。我が国においても地域振興の新たなビジョンとして導入をはかろうとする自治体が多いようだ(日本環境教育フォーラム、エコツーリズム研究会のレポートの抜粋)このエコミュージアムの専門家3人の方に具体的な事例を含めてお話ししていただきます。

日時：5月8日(金)13:30~17:00

参加費：会員無料(一般は、資料代1000円)

定員：30名

場所：環境パートナーシッププラザ

講師：大原一興(横浜国立大学工学部助教授・日本エコミュージアム研究会事務局長)

菅井正人(生活地理研究所代表 朝日町エコミュージアム研究会副代表)

嵯峨創平(まちづくりプランナー・日本エコミュージアム研究会理事)

開催日が迫っています。

希望者は、里地事務局まで

「地元学と里地おこし」

(第3回里地セミナー)

水俣市役所の吉本さんから、吉本さんの水俣における地元学の実践と陸前高田をはじめとする各地での地元学実践の事例と手法を学びましょう。

「地元学とは、地元の地元による地元のための情報づくりによって、活力ある地域づくりを目指すもの。学問ではなく、地元学ぶということ。地域の風土と生活文化の厚みがもつくり、地域をつくっていく。地域づくりには、地域の風土と生活文化の把握・充実が欠かせない。

地元の自然、風土、産物、伝説、出来事などを歩いて、探して、調べて、まとめる。調べたものをつないだり重ねたりすると、なぜこうなっているのか、それまで見えにくかったものやことが浮かび上がってくる。地元学は郷土史のようにただ調べるだけのものではない。地元学とは、地元の人が主体になって、よその人の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することから始まり、外からの否応のない変化を受けとめ、または、内発的に地域の個性にたらしあわせたり、自問自答しながら考え、地域独自の生活(文化)を日常的につくりあげていく知的創造行為である」

日時：5月9日(土)10:00~13:00

参加費：会員無料(一般は、資料代1000円)

定員：30名

場所：環境パートナーシッププラザ

14時~17時は、エコミュージアムと合同でワークショップ 兼 討論会形式で行います。

講師：水俣市役所環境課 吉本哲朗

開催日が迫っています。

希望者は、里地事務局まで

会場の案内図は、7ページにあります。

セミナー これからの予定

「パーマカルチャーと里地づくり」

日時：6月19日（金）13:30～16:30

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：日本大学生物環境工学課 教授 糸長浩司

「グラウンドワークと里地づくり」

日時：6月20日（土）10:00～13:00

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：東京農工大学 農学部地域生態システム学科
教授 千賀裕太郎

「地域はどうすれば活性化するか」

日時：9月18日（金）13:30～16:30

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：農林水産省農業研究センター
農学博士 長谷山俊郎

「外部参入者（インハビタント） と地域活性効果について」

日時：9月19日（土）10:00～13:00

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：財団法人 環境文化研究所 河原利和

「風・水・土とモンスーンアジアの 文化を見つめる」

日時：10月1日（木）13:30～16:30

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：ユーラシアクリエイティブジャパン代表
今井俊博

「日本の民族文化を伝承する」

日時：10月2日（金）10:00～13:00

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：民族文化映像研究所長 姫田忠義

「環境保全型の技術について」

日時：11月20日（金）調整中

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

講師：京都大学教授 内藤正明
日刊工業新聞 駒橋編集委員

「環境土木技術について」

日時：11月21日（土）調整中

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：30名

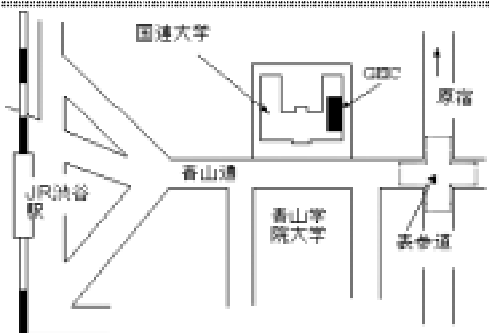
講師：西日本科学研究所 代表取締役 福留脩文

開催場所はいずれも環境パートナーシッププラザです。

地球環境パートナーシッププラザ

東京都渋谷区神宮前5丁目53-70 国連大学ビル1階
地下鉄表参道駅下車3分

参加のお問い合わせ、お申込は
里地ネットワーク事務局（03-35003559）まで



フィールドワーク

「森作りと環境ピクニック」

信州大学教授を5年前に退官され、放置された森林の再生を所有者から委託され行っている島崎先生による森作りセミナーと講習会。地元企業20社により構成されている伊那リサイクルシステム研究会が主催し、天竜川流域の企業50社、3000人ほどが参加する環境保全活動（環境ピクニック）。この2つに参加し、国内の先進事例を学びましょう。

場所：長野県伊那市

日時：5月29日（金）～31日（日）

29日（金）夜 島崎山林研修所集合

30日（土）早朝より森林塾の説明、山作り研修作業。夜、交流会。

31日（日）天竜川流域の環境保全活動である環境ピクニック。終了次第現地解散。

宿泊：島崎山林研修所（寝袋持参）

参加費：約12,000円

（2泊4食含む、交通費は別途）

講師：島崎洋路氏

「田舎暮らし体験講座」

本講座は、田舎への移住を考えている方々のための講座です。田舎暮らしの楽しさを体験し、厳しさも同時に知ってもらうために実際に移住している方々から体験談や助言などをしていただきます。

日時：6月5日（金）～7日（日）

日程：5日 オリエンテーション
・セミナー・交流会

6日 そば打ち・美麻村探訪など

7日 セミナー

場所：長野県美麻村

参加費：22,000円

（2泊6食・講習・交流会費含む）

詳しいお問い合わせ、お申し込みは美麻遊学舎（0261-29-2625）まで

「農業体験と懇談会」

山形県上山温泉を見下ろす小高い山の中腹で、サクランボをはじめとする果樹を栽培している里地ネットワークの会員・鈴木英夫さん。23年間有機農業に取り組んでいます。

鈴木さんの果樹園のすぐ下を流れる谷津の小川は開発が進みましたが、鈴木さんは地域に呼びかけ、ホテルの里を復元しました。この活動等がきっかけとなり、ホテルの里の上にある棚田が、山形県的生活環境改善事業に指定され、環境整備が終わり、市民による維持管理がまもなくスタートします。

サクランボの樹の下に立つと上山温泉と周囲の山麓の絶景に、思わず時間を忘れてしまうようです。果樹園の土と樹木のつやと肌触りは経験したものにしか分からない感動があります。地に足をつけ、土と樹木とみずからの生きざまに嘘がない農業を行なう鈴木さんの農業を体験してみませんか？

短期と中期のボランティアを募集します。

募集要項

場所：山形県上山市鶴屋町2-6-27

交通：山形新幹線 上山温泉駅（かみのやま）より徒歩20分

内容：日中はサクランボの葉摘み作業。夜は、ホテルの乱舞する谷津田見学など

中期の場合：6月10日～30日に連続して1週間程度作業ができる人。宿泊は鈴木さん宅になります。食事は鈴木さん宅にて家族と一緒にとっていただきます。

短期の場合：6月10日～30日の内、2泊3日の体験。宿泊は、徒歩10分程度のところにある地元の温泉ホテル（1泊 8500円：通常の30%引き程度）。

定員：1日あたり5名程度まで

詳細は、事務局までお問い合わせ下さい。

イベント

「エコライフフェア」

環境の日（6月5日）を中心に環境保全についての理解を深め、環境保全活動取り組みを推進するため、環境月間として毎年さまざまな行事が実施されます。1990年以来環境庁、東京都、業界団体、民間団体が一体となって「エコライフフェア」が開催されてきました。今年は、昨年までの屋内会場ではなく、東京渋谷のNHKホール前から代々木公園にかけた野外が会場です。

里地ネットワークもこのほど急ぎで出展することにしました。ぜひ当日はご参加ください。

なお、4月25日現在、以下の方々が出展を準備または検討中です。出展自体は無料ですので、会員の方で、出展を希望される方は事務局にご連絡ください。また、運営のためのボランティアも募集しております。具体的には、地方からくる出展者の支援と里山の遊びのブースの支援です。蜜蝋作りのお手伝い、地ビール販売のお手伝い、森と本の交換の手伝等です。学生、都市近郊企業人の方、奮ってご参加を。（事務局にご連絡を！）

日時：平成10年6月6日（土）～7日（日）
場所：渋谷区代々木公園、NHKホール前

里地ネットワークの出展予定・検討中団体：

山形県朝日町・ビーズファーム

「蜜蝋づくりと燭台づくり」

岩手県藤沢町・岩手藤沢株式会社

「りんごジュース他」

福島県只見町・タモカク

「森と本の交換所、たもかくの家具」

埼玉県・エコビジネスネット

パン職人と楽団グループ

埼玉県・竹とんぼ伝道師と遊具づくりと販売

東京都新宿区・浪漫亭

「里地交流クラブ浪漫亭の紹介」

静岡県函南町・酪農王国ビール工場

「循環型地域づくりの取り組みと地ビール」

三重県・赤目の森「里山の遊びと道具」

里地ネットワーク事務局

「里地ネットワークの紹介と里地の遊び」

里地ネットワーク事務局 おすすめ図書情報

「ピーターバーグとバイオリージョナリズム」

（グローバル環境文化研究所）

「ラディカルエコロジー」

（産業図書出版）

2月26日のセミナー「バイオリージョナリズム」
に関しての詳しい説明です。

「環境国家の挑戦 - 循環型社会を目指して - 」

（高杉晋吾著、NHKブックス）

「日本のダム」（高杉晋吾著、三省堂出版）

「産業廃棄物」（高杉晋吾著、岩波新書）

ドイツエムシャー川流域の環境まちづくりセミナー講演者高杉晋吾さんの著書。3冊とも、私たちは何をすべきか、どう行動していくべきかを語り、水とモノの流れを軸とした循環型社会の問題を取り上げています。里地ネットワークとの活動と重なるところも多い報告です。

「ILLUME（イルユーム）14号」

（東京電力省エネルギー推進部発行紙）

この雑誌には、エムシャー川流域の環境まちづくりのレポートが載っています。